地域情報（県別）

【京都】新病院建設の真の目的は後継者育成-木原俊壱・京都木原病院理事長・院長に聞く◆Vol.2

新病院はフルサイズの手術室３室と4Kモニターを設置

m3.com地域版

京都木原病院（京都市）は2024年3月15日、前身の京都脊椎脊髄外科・眼科病院の老朽化に伴い新病院へ新築移転した。同院の理事長・院長木原俊壱氏は、旧病院の開業当初から新病院への構想を持ち、新たな手術室には、その構想の一つである木原氏の考えたアイデアや思いが詰まっている。木原氏に新病院の手術室の特徴や今後の展望などについて聞いた。（2024年4月15日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

木原俊壱氏

――新病院の手術室の特徴は何ですか。

将来膝や股関節の人工関節手術や内視鏡手術、ロボットによる脊椎脊髄手術もできるようにフルサイズの手術室を3室設置しました。手術治療項目を首、背中、腰に加えて、患者からのニーズが多かった膝、股関節、足首、肩、肘などにも対応する予定です。

現在は4Kモニターを見ながらの手術を始めています。モニターを見ながらの手術の利点は手術の安全性と、術者の疲労軽減ができることです。また、モニター越しに手術を指導できるので、若手医師の教育には最適です。さらにコメディカルの教育でも、モニター越しに術者のペースを落とさないように器械出しの方法を学べます。

手術室

――新病院を建設した真の目的は、木原先生の後継者を育てることだそうですね。

私は、自分が開発したK-method（低侵襲頚椎椎弓形成術）による脊椎脊髄手術で多くの患者を救い、メディアにも取り上げられました。メディアでは、私以外にも「スーパードクター」とか「神の手」などの呼び名で手術自慢の先生方が取り上げられ、「その人にしかできない」というふうにクローズアップされているように感じます。

医療とは、スーパードクターを輩出するものではなく、一番大事なことは、1人でも多くの患者や家族に対してどのようにして笑顔や喜び、幸せを届けるかということだと思います。そのためには、後継者を育てることにより、いつまでも安心して医療が受けられる体制を整えることが大事だと思っています。

当院としては、私が行う脊椎脊髄手術の担い手を育てることが急務です。なぜなら、安全で正確な治療を求めて来院される患者の数と比較して後継者の数が圧倒的に足りないからです。

脊椎脊髄手術の経験がなくても構いませんし、診療科も問いません。私は本当に患者のためになる外科医を育てたいと思っています。脊椎脊髄疾患分野を極めたいという若い医師がいれば、私は喜んで一から教える覚悟です。

――旧病院の環境では、後継者育成は難しかったのですか。

旧病院は脊椎脊髄手術の後継者を育成できるほど手術スペースが広くなく、1回の手術で多人数での育成ができませんでした。また、育成プログラムの拡充や実務経験の提供において、十分な環境を提供できていないことが明らかでした。

新病院ではフルサイズの手術室3室と4Kモニターを設置できていることから、多人数での育成に充分な設備と環境が整っていると思います。また、シーメンスの最新式MRIおよびCTを完備し、安全で身体の負担の少ない世界水準の検査も可能です。医療技術も日に日に進歩を遂げているので、より効果的に学び、成長することができる育成プログラムを今後考えていく予定です。

――後継者育成と病院経営を両立することの難しさはありますか。

脊椎脊髄手術は技術が必要なのにも関わらず収益性が低いです。手術中に使用する人工骨は安価であり、抗生物質の使用もほとんどありません。手術翌日には歩行可能で、経営的には有利とは言いがたいでしょう。

しかし、社会的には、低侵襲で医療費のかからない手術がますます必要とされており、何よりも患者の利益になる手術です。後継者が技術を習得して巣立った時には、各都市の病院で脊髄脊椎の手術や治療を行える病院を開設してほしいと考えています。この思いと技術をこの新病院で後継者たちに伝えていくことが私の使命だと感じています。

そして病院経営については、脊椎脊髄の手術件数も増やしていくとともに、今後開設予定の整形外科専門外来部門とリハビリ部門を充実させ、総合的に利益を上げていく予定です。

――働き方改革が進む中での若手医師の教育について、どのようにお考えですか。

現在の働き方改革で医師がちゃんと育つのかというと、どうなのかなとも思います。医療の臨床現場では、定時で終わることもあれば、緊急対応が必要で定時を過ぎてもやらざるを得ないこともあります。必要以上に現場に拘束される環境は改善しなくてはなりませんが、定時で終わる働き方改革が医療の現場にそぐわない面があることも事実です。私が研修医の頃は診療以外でも、カンファレンスでの症例検討会に備えるための資料作成や、手術計画の見直し、シミュレーションなど睡眠時間を削ってまでしなければなりませんでした。また、学会発表や英語の論文執筆も日常的に行っていました。

しかし、現在の働き方改革では、時間外労働の短縮が問われています。時間外労働だけでなく、労働時間外とみなされてしまう自己研鑽に費やす時間も含め、多くの負担が医師にかかっています。医師は、自分の時間や人生を費やして経験することで得られるものもあると思います。たとえ医科大学での勉強や、本を読んで知識を得たりしても、それを実際の現場で活かすには、やはり臨床経験や本人の工夫、臨機応変さ、決断力などのさまざまな要素が必要だと感じます。働きやすい環境とは何か、一方的な改革ではなく、医師とともに本当の意味での働き方改革を実現していくことが大事だと思います。

われわれの時代が理想的だったとは言いません。体調を崩すことや精神的なダメージがあった医師などに対しては指導員がいつでも相談できる体制が必要かと思います。

――最後に京都府の医師にメッセージをお願いします。

当院は常に混み合っており、手術待ちの患者が多いという印象があるようで、京都府からの紹介が少ないように感じます。しかし現在副院長や医師が増員され、毎日手術を行っており、いつでも受け入れ可能です。入院患者には無料で提供できる個室をできるかぎり用意しています。手術の必要性については当院で判断し、不要な場合は患者に説明します。首や腰の痛みやしびれが気になる患者は、ぜひ当院での相談をお勧めください。

◆木原 俊壱（きはら・しゅんいち）氏

1988年佐賀医科大学（現：佐賀大学医学部）卒業後、佐賀医科大学脳神経外科研修医入局。その後、佐賀県立病院好生館脳神経外科研修医入局。1989年同大学研修医（脳神経外科、消化器外科、麻酔科、胸部心臓外科）。1990年有田共立病院脳神経外科入職、1991年聖マリア病院脳神経外科入職。1992年佐賀医科大学（現：佐賀大学医学部）医員入局後、同大学文部教官助手。1994年米国カリフォルニア州ロマリンダ大学留学。1999年大津市民病院脳神経外科医長入職。2005年同病院診療局手術部診療部長（兼脳神経外科医長）就任。2013年医療法人社団親和会京都脊椎脊髄外科・眼科病院（現：京都木原病院）理事長・院長就任。

【取材・文＝田中 嘉尚（写真は病院提供）】

記事検索 ニュース・医療維新を検索